

コラム

コンドームの歴史

ベネトン社がわが国で初めてコンドームのテレビコマーシャルを試みたことが、物議を醸している。日本製コンドームは世界最高の品質と賞賛されていることもあって、わが国では、近年のエイズ騒動よりずっと以前から、ピルが避妊法の主流だった欧米とは異なり、避妊法の8割近くがコンドーム使用であった。世界的には、唯一のエイズ予防具として、コンドームの需要がますます高まるなかで、日本でのコンドーム消費量は横ばい状態であるという。日本に9社あるコンドームメーカー間の販売競争は、逆に熾烈化している。製品には、耐久性や機能性のみならず、ファッション性も求められてきている。

コンドームは、16世紀半ばに、イタリアの解剖学者 Gabriele Fallopio (1523-1562) により、布(リネン)製の鞘状の器具が、当時、大流行していた梅毒の予防用として考案されたのが始まりであるとされる。Fallopio (Fallopius) は、女性生殖器の解剖に関して、処女膜や陰核を含めて、初めて詳細に記述したことで名を残した。卵管をラッパ管と呼んだのもこの人物で、現在でも、卵管はしばしば、ファロピウス管 Fallopian tube と称される。

話は少し脱線するが、処女膜 hymen (発音はハイメン) は、ヒトとモグラにしかない貴重品である。ギリシャの婚姻の神ヒュメーン Hymen がその命名の由来だそうだ。美青年ヒュメーンは、海賊に襲われた少女たちを果敢に救い出し、彼女たちはみな好きな恋人と結婚できたのだ。

本格的な避妊用のコンドームは、1706年に山羊の腸でつくられた。発明者は、イギリス国王チャールズ二世の侍医で、かつて近衛歩兵第一連隊の大佐を勤めたコントンだった。彼はこの発明の功績で、騎士(ナイト)の称号を与えられた。「コンドーム condom」は、このコントン医師の名にちなんだものとされる。彼は、山羊の腸を適当な長さに切り、陰干しの後、油脂でなめして柔らかくしたのだ。できあがりには、長さ19 cm、厚さ0.04 mmの超薄皮膜製だった。イギリスでは、国中のあちこちの牧場で、羊毛とともにコンドームがつくられ、さかんに輸出されたという。その後、

魚の浮袋製のコンドームもつくられたが普及せず、20世紀になってゴム製品に代わるまで、この腸製が圧倒的に人気があった。

1843年、アメリカのグッドイヤーにより、ゴムの加硫操作が発明され、1874年(明治7年)にはついにゴム製のコンドームが登場した。国産第一号の天然ゴム製のコンドームが製造されたのは、1909年(明治42年)のことであった。1934年(昭和9年)、ラテックスゴム製コンドームが開発された。1960年(昭和35年)頃には、ウェット加工、着色、薄さへの挑戦がなされ、たとえば、厚さ0.02 mmといったような、今日の高品質がもたらされた。

エイズ多発地域である東アフリカでは、ホテル等の男性トイレにコンドームが無料援助されていると聞く。1994年8月に横浜で開催された第10回国際エイズ会議では、コンドームの展示がなされたそうだ。ソウル、アルペールヒル、バルセロナと続くオリンピック大会でも、選手をエイズから守る名目で、選手村にコンドームが無料で配布された。バルセロナ五輪では、6カ国の製品がテストされ、結局、フランス製が採用されたのだが、実は、この製品は、日本の某会社が製造し、フランスで包装されたものだったそうだ。先に広島で開催されたアジア大会でも、コンドームの無料配布が行われたそうだが、これもエイズ予防のお題目だったのだろうか。

最近では、エイズ感染防止の目的から、女性用コンドームが登場した。デンマークで開発されたこの新兵器は、ポリウレタン製で、全長が15 cm、開口部の直径が7 cmの袋である。男性が男性用コンドームの使用を拒否したとき、女性の意志で自ら装着する、といった使い方が、とくにその筋の女性たちに奨励されている。エイズの蔓延で20世紀初頭までに総人口の減少が予想されているタイでは、風俗業女性に対する女性用コンドームの無償配布が、公衆衛生省により検討されている。エイズに対する治療薬のない現在、知識という名のワクチンとともに、コンドームによるエイズ予防への期待はきわめて大きい。

(医学のあゆみ 1995, 174 : 158 より引用)